

AG5

補習授業校情報交換会 #32

補習授業校で学ぶ意味

各地の開始時刻
2021.10.24

ハワイ	4am
太平洋	7am
山岳部	8am
US中部	9am
US東部	10am
英国	3pm
独仏	4pm
タイ	9pm
中国	10pm
日本	11pm

<翌日>

キャンベラ	1am
NZ	3am



本日の予定

1. 各校からの報告
 2. 質疑・意見交換
- 終了後、グループ懇談（15分）

◆ これからの情報交換会

今のところ未定です。

リクエストは、ag5nsassa@gmail.com
tommitsu1122@gmail.com へ

◆ 情報交換会の録画について

スタッフの反省材料とするため、ミーティングの録画をさせていただいておりますが、それ以外の目的でお見せすることはいたしません。ご理解をお願いいたします。

◆ 出席者と連絡を取りたいとき

ご希望をお知らせください。相手の方の許可がいただければ、メールアドレスをお知らせします。

◆ こちらもごらんください

過去のAG5 補習授業校情報交換会資料 <https://www.ag-5.jp/post>

AG5 ウェブサイト <https://www.ag-5.jp>

補習校教員交流 Facebook <https://www.facebook.com/groups/1664125650300837/>

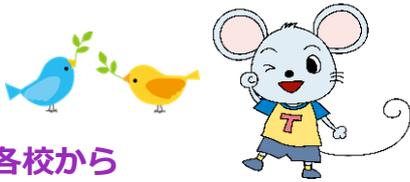
海外子女教育振興財団 (JOES) <https://www.joes.or.jp>



ここが聞きたい

- ・ 1.現地に永住するのに日本人補習校で何故、日本語を学ぶのでしょうか。
- ・ 2.補習校卒業生に対して、補習校で学んだことが仕事や生活に活かされたか、もしくは活かされないか伺いたいです。
- ・ 通常の対面授業に勝るものは何もないのですが、オンライン授業だからできた、新たな発見はありますかでしょうか。また、講師による保護者への心理的、家庭支援における技術的な面でのサポートの重要性を皆様はどのようにお考えでしょうか。
- ・ 日本で生活していた時には、たとえ病気になって、学校を休むということは、誰しも罪悪感があったのではないかと思います。ところが、海外の補習校では、現地校のイベント、部活動や家族旅行や一時帰国では補習校の欠席事由として、当たり前のように書かれています。生徒が学校を休むことに対して、何ら疑問を持っていないことが、ちょっと心配です。
- ・ 親御さんの意思で来ている生徒さん（本人にやる気が見られない）、また保護者の方からの家庭での協力が見られず宿題が追い付かない、日本語学校の勉強がおろそかになってしまう生徒さん、現地校では優等生でも日本語学校では劣等生になってしまい、やる気を失ってしまう生徒さんなどどのように対応していけばいいかご教示願えると助かります。
- ・ 各校の教育理念・教育目的・教育目標・教育方針をお聞きしたいです。
- ・ 現地校の中学、高校進学、高校の単位の申請などの際、Extra activity として補習校で学習していること（日本のカリキュラムで学年相当の言語能力があること）を証明してもらえると、補習校に通っていることが現地校にもプラスになる、現地校の先生にその頑張りを認めてもらえるように思います。また、現地校の先生方はそれほど高い能力を維持させる補習校のような学校が海外で存在することを知らないで、それを知らしめるきっかけにもなると思います。補習校の先生方に推薦状を書いてもらうということになりますが、それは考えていただけないものでしょうか。もしそれぞれの学校で対応ということであれば、委託するか何らかのシステムがあればと思いますがいかがでしょうか。（わが補習校の小中学部は最初個人の先生が書いてもいいと言ってくれても、補習校が一人だけが書いてはいけないというルールがあることを知って最終的に断られたという方が何人かいますが、とても残念に思います。）
- ・ 今回のタイトルでは幼稚部としては子供からの気持ちはあまり表現されませんが、会議に参加して参考にしたいです。
- ・ 補習校で学ぶ意味は、子供のため？それとも親のため？
- ・ 小学校から中学校、また、中学校から高校への進学をためらう御家庭が見受けられます。「永住だから、帰国時の受験では必要ないから。」という理由も見られますので、近い将来だけを見た判断では無く、長い目で見た時に、海外で日本語補習校で学んだ事が役に立った。そう言えるきっかけ探しが出来ればと思います。
- ・ 教員内でどの程度学校のビジョンやミッションが共有されているのか。されているとしたどのように共通認識をとっているのか。
- ・ 今回のテーマにおいて、他校の先生方の生徒への対応をお聞きできましたら幸いです。

- ・進級していくにつれて生徒のモチベーションを継続していくことへの難しさを感じます。現在オンライン授業のため友人関係構築も難しい状況ですよね。生徒個人、またご家庭の意欲意識を高めるヒントがあれば知りたいです。
- ・他の継承日本語学校ではなく、補習校に通う意義・補習校での学びと習い事や現地校の学習との両立。
- ・中学、高校では文科省の教科書を主に使っていますか？それとも独自の教材を使っていますか？「補習校をやめたい」と中学生になった子供が言い出した時、どういうふうに答えればいいでしょうか。
- ・学びのレベルについていけない子どもをどう支援していくのかについてお話を聞きたいです。



各校から

♣チェンマイ *****

チェンマイ補習授業校に2000年より携わっておりますが、講師陣の悩みが「クラス内での学力の格差」にとらわれてしまうことで、20年間問題意識が何も変わっていかない気がしております。講師による勉強会や教育運営会議を行い、「移動する子どもたち」「サードカルチャーキッズ」「二重国籍児のアイデンティティ」などについて講師がまだまだ学ばなければならないことを一緒に追いつけており、そこからあらゆる背景の子どもたちが補習校で学ぶ意義は何であるのかを模索しております。（宮原 三保子）

♣ロチェスター *****

私事ですが、4人の子供が補習校のお世話になりました。一人は日本に留学中、もう一人も大学在学中に日本留学を果たしました。残る二人も日本への留学を考えています。4人とも将来的にはバイリンガルであることの強みを生かした就職を希望しています。これも皆補習校のおかげです。

（山岸 知美）

♣ビエンチャン *****

同じ日本国籍の子ども同士が仲良く友達になることができる。日本語を忘れずに日本語の力をつけていくことができる。（小川 幸宣）

♣ニューポートニュース *****

補習校で学ぶ意味づけは、生徒一人一人が「自分にとって何なのか」を見つけられるようにと願っています。卒業式で教員代表挨拶を担当しているので、毎年、卒業生徒の近況やコメントをメッセージとして伝えるようにしています。また、米生活を送る日本人として、人とのつながりやその喜びを実感できるようなお話をするようにしています。（モース 結子）

♣アイルランド *****

一時期11名いた講師がたった5名になりました。長期、無理なく働いてもらえる環境づくりはどうしたらいいのでしょうか。（パティソン 朋子）

♣リッチモンド *****

リッチモンドでは2学期から対面授業を行っておりますが、運営委員のご尽力のもと、避難訓練を実施しました。またハロウィーンの仮装登校もあります。今回のテーマについては、どの先生も直面する問題だと思しますので、是非皆様と意見交換をできましたら幸いです。（三川 早苗）

♣チューリッヒ *****

人間とチンパンジーの違いを用いた高等部卒業生の言葉を紹介します。「補習校基礎学習をし、日本語という道具を手に入れ、ヒトとして進化を遂げた。教科書の文学の向こう側に何かあるのかを考える力、想像力を伸ばし、好奇心を満たすことができた。つまり、補習校基礎学習のその上に、知の楽しみが待っていた。」（長森 千枝）

♣先生、保護者の声 * * * * *

◇小6の歴史の授業をしたときに、パールハーバーの話が出てきました。現地校で world war 2 を学ぶ時もある生徒たちにとっては、引け目を感じることもあるらしく(もちろん地域にもよります。人種の垣塙なら気にならないかと)、日米両方の視点から学ぶことができたのは、通っていたお陰お蔭ですと保護者に言われました。思春期はアイデンティティーの確立時期ゆえ、帰属意識を守ってくれる存在でもあるのかもしれませんが。

◇当校の卒業生(中等部)の一人は、この秋、法政大学のグローバル経済学・社会科学インスティテュートに入学しました。昨年度とその前の年、高等部には進学せず、ボランティアをしてくれました。ちょうど私の学年を手伝ってくれたのですが、最後のやり取りで「補習校で学んだことに無駄なことは一つもなかった」とメールに書いてくれました。他にも同じような思いの人はたくさんいると思います。私自身も保護者として長く補習校に関わってきましたが、とても感謝しています！

♣生徒たちの声 * * * * *

補習授業校の中学3年生の卒業文集の中から、補習授業校について書かれた部分を抜き出してみました。(みなさんに読んでいただくために一部書き直した部分があります。)

◆現地校でハイスクールに入ったら、ことが変わり始めた。マーチングバンドの練習が始まって、中学二年生の二学期辺りからあまり補習校に行けなくなり、友達やクラスメートとあまり話せなくなった。行ってもすぐ早退する通い方を続けていた私は、「なんで行かなきゃいけないの?」と何度も思いながら通っていた。現地校の宿題は夜遅くまで起きてやるしかなくて、補習校にいる時間はただの無駄な時間に思えてきた。授業にも参加できなくて、宿題の意味も分からなくなり、全てが大変で嫌になってきた。「補習校を辞めたい」という気持ちになったときもあった。それでも補習校に通い続けて、私はこの生活に慣れてきた。

振り返って考えてみると、補習校は全く悪くないし、通い続けた後悔なんて一つもない。今、一番仲良くて、一番大切な友達たちに会えて、仲良くなれたのは補習校のおかげだ。限りなくたくさんの思い出が作られたのも補習校に通い続けたからだ。

◆現地校でつらいことがあっても、補習校に行けば、どんな話でもみんな真剣に聞いてくれました。私にとっては聞いてくれるだけでも十分でしたが、みんなはちょっとした変化にも気づいてくれて、声をかけて励ましてくれました。補習校のみんながいたから、毎日現地校にも通うことができたのだと思います。補習校にいるとき、私はとても素直な気持ちでいられます。補習校のみんなといるときの心地よさは、「同じ日本人」だからではありません。補習校のみんなが、優しく、思いやりがあって、温かく、そしてみんな、頑張り屋さんだからです。本当に、たくさん助けられました。正直、アメリカに来て、こんなに人に支えてもらうことになるとは思っていませんでした。

◆僕の学校生活での多くの思い出は補習校の仲間たちと作ってきた。その思い出の数々を通して人とのコミュニケーションの大切さ、相手の気持ちになること、そして仲間の大切さを学んだ。

◆後輩たちには、補習校での毎日をたくさん遊んで、勉強も頑張っ、悔いのないように思いっきり楽しんで思い出をたくさん作って欲しいです。まだ仲良くなれていないクラスの子にも声をかけたりして、みんなで楽しんでほしいです。補習校で作った仲間を宝物のように大切にすることを願っています。

◆補習校に通うことによって、仲間を大切に、その人達との縁を大事にすることを僕は学びました。補習校という場所は、仮面をかぶらず、ありのままの自分でいられる安心できる場所です。補習校の先生方とクラスメイトと後輩たちと出会って、僕は本当に幸せ者だなと思います。一人ひとりが僕の毎日に楽しみをくれました。僕はみんなが本当に大好きです。

◆補習校での学校生活で一番役に立ったと思うことは、日本語を使っのコミュニケーションを恥ずかしがらないでできるようになったことです。日本の学校に行った時にできた友達や日本に住んでいるそのほかの人達と日本語でコミュニケーションを取れるようになり、日本語に多く触れることができました。そして日本語をまず理解することで、英語の理解に役立てることができるようになったことだと思います。英語は日本語よりも理解力が遅れているため、日本語を理解することで、英語の単語や意味がわからない時に親に日本語に翻訳してもらい、現地校の勉強にも生かすことができました。

◆現地校の方ではハイスクールに入り、フレッシュマンとしてマーチングバンドに参加しました。ハイスクールではミドルスクールより宿題、テスト、プロジェクト、スピーチなどが増え、ファイナルなどやらなければならないことが一気に増えました。私は限られた時間の中で、自分は何をやらなければいけないか、何を優先しなくてはいけないのかを考えるようになりました。もちろん、友達と遊ぶ時間も私にとって、とても大事なことで減らしたくありませんでした。何度も家族とこれからのことについて話し合いました。すべてを両立できるはずがないので、とても難しいと感じました。十一月にはバンドシーズンも終わり、補習校では最終学年として劇に挑戦しました。時間をかけてみんなで練習をして頑張りました。練習の成果があり本番も大成功だったと思います。みんなで一緒にやり遂げたという実感が湧きました。アメリカに来て約一年半ですが、ミドルスクール卒業、ハイスクール入学、補習校での日本語学習、たくさんの人たちとの出会いなど、毎日が充実した素晴らしい日々でした。これからもっと色々なことを頑張っていこうと思います

◆補習校の友達に会えるのが嬉しい理由の一つは、皆日本人であるという共通点があるからかもしれません。それに、現地校と補習校の両方に通っている大変さなども分かり合える仲間だからかもしれません。補習校でみんなに出会って、本当によかったと思います。僕は、またハイスクールでのスポーツが始まるので、補習校に授業の最初から行くことができなくなります。補習校にいる時間を大切に、残りの時間もクラスメイト達と一緒に楽しく過ごしたいと、改めて思います。そして、補習校を卒業しても連絡をとって、一緒に遊びに行きたいです。

◆補習校での生活が、少しずつ私を変えてくれたのだと思います。恥ずかしがり屋だった自分は、悩んだ時期もあったけれど、それを乗り越えてきたからこそ変わったのだと思います。もし、あなたが今、補習校で苦しんでいたり、補習校が楽しくなくなっていたりしたら、その理由を見つけ、思いっきりぶつかってみてはどうでしょうか？通い続けていたら、また新しく、違う楽しさが待っています。だから、最後まで補習校を辞めないでください。必ず楽しい時がやってきます。でもそれは自分で何かの壁をぶち壊してみないと出会えない楽しみかもしれません。だから前向きに歩いて、楽しんで通ってみて下さい。補習校での思い出は一生残ります。クラスメイトとの距離も近くなり、忘れられない補習校での思い出となるでしょう。

◆補習校でできた友達にもとても感謝したいことがたくさんあります。途中から入って来た私にとっても優しくしてくれて、とても感謝しています。はじめはなかなか仲の良いともだちができず、慣れない現地校の後に通うのはとても疲れてしまっていたけれど、今では仲の良い友達がたくさんできて補習校に行くのがとても楽しみです。

私はアメリカに来て友達の大切さを実感し、感謝したいことがたくさんあります。また、このように人がしてくれた親切や優しさなど、してくれた人はあまり覚えていないかもしれないけれど、してもらった人はそのことをよく覚えています。そのため、日々感謝を忘れず、今まで友達や周りの人がしてくれたような親切や優しさなどを、自分が周りの人にできるように頑張りたいです。

こういう経験を積んで補習校に通って分かったことは、たくさんの人と出会って交流することが人生で最も大事だということです。補習校に行くのが辛かったり、嫌だったりしたこともありましたが、今まで補習校に通い続けて良かったと思います。卒業まで、勉強も頑張り、みんなとの時間を大切にしたいです。

◆僕は、ずっと理系や数学に興味がありました。それは、ある意味補習校と現地校のおかげだと思います。現地校の小学校と中学校では、質問をたくさんして、クリエイティブな考え方で問題を解くことを教えられてきました。しかし補習校では、基本的な問題をまず解いて、その次に難しい、現地校でも見たことがないような問題が出されることが多かったのです。この最高の組み合わせで、僕は現地校のクリエイティブな考え方を使って補習校の難しい問題を違うやり方で解いてみたりしました。そして、たくさんの問題に触れるにつれて、僕は基本の問題だけではなく、もっと難しい、おもしろい問題を解くことができるようになりました。すると、「この問題が解ける！」という実感が増え、どんどん理系の科目と数学を楽しめるようになりました。

◆毎週補習校に行きました。サッカー、ラグビー、野球、バンドと重なっても、ほとんど休みませんでした。行くのが当たり前で、行きたくないとか、辞めたいとか、そんなこと考える暇もないぐらい普通に補習校に行くのが僕の生活でした。その中で最も記憶に残っていることは、僕が作った友達です。日本に帰るときは、当たり前にも必ず補習校の友達に会います。一年会ってなくても、ずっと一緒にいたような気持ちになって、一緒に行動します。会う時はまるでずっと一緒にいたみたいだし、離れていても離れている気がしません。毎年当たり前のように楽しみでしたが、これからは、なかなか日本に帰れないかもしれません。でも絶対に一生忘れないし、歳を取ってもお互いに忘れないし、会えなくても懐かしい気持ちだけは残ると思います。そして、僕がアメリカに住みながら当たり前にも補習校を辞めず最後まで通えたのも、友達が同じように卒業まで補習校にいるからです。

◆補習校に感謝していることがあります。アメリカに住んでいるのに、いつの間にか日本の文化や伝統が身についていたことです。やはり、英語と日本語の両方を学べるのは僕のルーツに結びつくのです。日本は、何千マイルも離れているけれど、補習校に通うと、自分は日本のルーツを持っているということを思い出させてくれます。日本に住んでいないのに当たり前にも日本のことをたくさん知ることができたのも、二つの学校に行ったことも、とても特別で、重要だと思います。両親とも日本人の人には当たり前かもしれませんが、僕にとって日本の親戚や日本に住む友達と日本語でコミュニケーションが取れるのは、特別なことです。だから補習校での日本の行事は毎年楽しみでした。餅つきは、友達と食べたことが忘れられないし、運動会では、卒業生がリレーを走るのをみて、僕もいつか卒業したら出たいと思っていました。最近日本のアニメをよく見るようになりましたが、いつの間にかこんなに日本のことを知っていたのかと、自分で驚く時があります。

◆現地校で高校に入り、宿題やスポーツが補習校と重なり始め、補習校を辞めたいと思ったことは何度もあります。それでも今、卒業まで後わずかのところまでこられたのはどうしてなのかを考えました。この作文を書きながら考えたところ、ここまでこられたのは、「補習校が本当に好きだから」だと気づきました。私にとっては補習校は日本の文化に触れ、日本語の勉強をするだけではありません。小さい時からですが、特に今、補習校は現地校のクラスの宿題やストレスなどを数時間だけでも忘れられる場所でもあります。英語のエッセイのことや、次の日の数学のテストのことをすべて忘れて、補習校の先生やクラスメイト達と共に楽しい時間が過ごせることが、十一年も続けてこられた一番の理由だと思います。

◆「補習校に行く意味がないんだよ！」「辞めたいよ！」

この気持ちは小学校から親に対して言ってきた言葉です。中学校に進学する時にはこの気持ちはますます大きくなり補習校に行くのがめんどくさくなり、嫌になりました。でもそういうときに、「絶対辞めない方がいい、後悔するから。」と、親がいつも言ってくれたことに感謝しています。私にとって日本語を学ぶのは難しかったです。毎年新しい漢字を習い、日本の学校で五日間で学んでいるものを二日で全部学ぶのは内容量が多くて覚えるのが大変でした。でも、私が辞めなかったのは、支えてくれた先生と友達がいたからです。みんなも現地校と両立するために頑張っていたので、私も頑張れました。補習校のおかげで、A Pジャパニーズで一番高い五の成績を取ることができました。この十二年間の補習校の経験、友達、先生方のことは一生忘れません。

◆住んでいる町も、現地校も違い、補習校がなければ、会うことができなかつたかもしれない私達が補習校で出会えた。補習校は「アメリカにいながら、日本のことを日本語で学べる」恵まれた環境だった。

◆補習校で一番感謝していることは何ですか？」と聞かれたら僕は即座に「友達」と言います。もちろん日本語を学べたことも感謝しているけれど、絶対に僕にとって学力よりも友人達との「きずな」が一番大切なことだと思っています。

◆補習校に十二年間通うことができたということは、いまだに信じられないような気持ちです。現地校に通いつつ、補習校に毎週登校し宿題やテストの準備に時間を費やす、そんな生活をずっとしてきたとは、我ながら良く頑張ったと思います。補習校は現地校が終わってからなので、「疲れたなあ。」と思った時もありました。この十二年間、僕が補習校に通い続けることができたのは、ずっと僕をサポートしてくれた両親、それから先生方の温かいご指導と、辛い時でも一緒に乗り越えてくれたクラスメイトたち、みんなの支えがあってこそだと思います。本当にありがとうございました

◆中学二年生の四月に補習校という新しい環境に入り、「授業についていけるかな…」とか「クラスに馴染めるかな…」とか、引っ込み思案な僕には不安が多かった。だがみんなが声をかけてくれたり、「お前をうるさくしてやる」と宣言してくれる子がいたり、補習校という場所が直ぐに居心地の良いものになった。いい意味で、一人にさせてくれなかった。それは僕にとって本当に嬉しいことだった。優しさは、時に誰かにとって大きな意味を持つことがある。しかし、自分のことに集中し過ぎたり、イライラしたりして、知らないうちに忘れてしまうことがある。だから忘れてしまったとしてもまた思い出し、そしてその時思い出した優しさを持ちながら人に接してみよう。僕はそう考えるようになった。この気持ちは、将来僕が老いぼれになっても忘れないでいたい。

ポート・オブ・サクラメント補習授業校
創立 30 周年記念 特別号 「30 年のあゆみ」より

「日本人」の自分

大人年立派組

辻 大介

僕の家族がアメリカに引っ越す前、父は「2年経ったら、日本に帰るからね」と言った。父は冗談を言うのが好きであった。アメリカに住んで2年経つと、父は「もう1年」、3年経つと「もう、1年」と言う。「冗談じゃない」と思ったが、子供の僕にはどうすることもできなかった。気付いてみれば僕達は16年もアメリカに住んでいた。少しずつ、子供の頃得意だった漢字テストの点数が低くなり、英語のスペリングテストのスコアが上がってきた。日本人学校を卒業する時には日本語で論文を書く事が不可能に近くなってきており、アメリカの大学の入学テストの勉強で精一杯であった。自分は日本人なのか、それともアメリカ人なのか、混乱したことをよく覚えている。しかし、自分の頭の中では、日本人よりアメリカ人に近いと思っていた。その頃、「また日本に帰って住みたいと思いますか」と聞かれたら、僕の答えは「ノー」と答えたであろう。僕が、いずれシルク・ド・ソレイユというサーカス団と一緒に1年半日本で過ごすことになるとは、その頃は夢にも思っていなかった。

ここではっきり言っておこう。僕は普通の日本人でもなかったし、アメリカ人でもなかった。あえて言えば、父に似て冗談を言うのが好きなひとりの若者といったところだ。日本人学校で一番待ちどうしかったイベントはクリスマス会。そして、僕のクラスは決まって劇を演じた。今でも、男の僕がシンデレラを演じたことを校長先生も忘れてたくても忘れられないだろう。クリスマス会のときだけいやに目立つ僕には、未来の道が決まっていた。役者である。

どの職業でも辛い事や厳しい日々はあると思う。役者という職業の厳しいところは、役者として才能があっても、キャラクターのイメージに合わなければ雇われない。ある仕事に雇われたとしても、また次の仕事につながるとは限らない。誰かが僕のためにプロモーションをしてくれるわけでもない。役者の世界ではオーディション、つまり仕事探しそのものが仕事という感じである。

僕がシルク・ド・ソレイユのためにオーディションを受けた時は、自分でもうまくいったと思った。その時は道化役（以下“クラウン”という）のオーディションだったので、動きも声も大きく演じた。そして、シルクが僕に合格の電話してきた時は、その電話そのものが驚きだったが、もう一つ驚いた点があった。それは、僕に演じてほしい役は身振りや声が大きいクラウンではなく「普通の日本人観客」の役だったことだ。自分で頭の中が日本人よりアメリカ人に近いと信じていた僕にとって、日本で「普通の日本人」の役を演じなくてはならないという責任感は本当に大きかった。

これを今読んでいる人の中でシルク・ド・ソレイユのツアー・ショーの一つ、ドラリオン、を観た事がなくて、いずれ観にいきたいと思っている人はこの部分はネタバレするので、読まない方がいいかもしれない。クラウンがサーカス・ショーの中で観客を使って笑いを取ることはごく普通にあることだが、ドラリオンが他のショーと違うところはクラウンが同じ観客を3回も選ぶ事とその観客が出演者の一人だということだ。ドラリオンがヨーロッパから日本に行く事に決まった時、日本人の観客の役を演じる役者が必要となった。その頃タイミングよくシルク・ド・ソレイユにオーディションしたのが「日本人」の僕であった。人生タイミングがいい時があるんだな、と感慨深く思った。

シルク・ド・ソレイユで働くことは楽しみだったし、日本で1年半も過ごすということは、僕にとって大事な経験になるだろうと想像された。それまで、アメリカに住んでいた16年の中で日本に戻ったのは3、4回だっただろうか。しかも、毎回一週間くらいの滞在であった。僕は、ドラリオンと一緒に東京、仙台、大阪、名古屋、東京（2回目）、と福岡にそれぞれの都市に2、3ヶ月住み、さらに休みの時は北海道、沖縄、京都、広島などいろんな所に旅して、今までに知らなかった日本を体験することができた。

ツアーで最初にできた友達はやはり英語を喋るドラリオンのキャスト仲間である。よくその友達に日本語の通訳を頼まれたが、自分でもどうやって訳すのか分からない時が何回かあって、「おまえ、日本人じゃないだろ」と言われたことも多い。アメリカに住んでいた時は自分の家族とは日本語で話していたのだが、英語の単語や文章がすぐに会話にでてしまう。日本で日常的に会話するのは難しく、ツアーの中の日本人やシルク・ド・ソレイユの裏方で働いていたフジテレビの人達と友達となるのは、日本語が自然に会話で出て来ない僕には無理だと考えていた。しかし、実際にはそうでもなかった。僕を日本人だとは認めないかも知れないが、友達になることはそういうこととは関係ない。新しい日本人の友達と話しているうちに、僕の日本語も前よりも自然に感じる事ができた。沖縄の言葉「イチャリバ・チョーデー（一度出会えば、もう兄弟）」もその友達のなかの一人から教わった。

おなじように、僕の役「普通の日本人観客」を演じる事は初めに思ったより簡単であった。もちろん、観客を笑わせることも大事で、そういう意味では困難だった日もあった（特に大阪では…）が、自分が日本人である事を日本人の観客に信じさせるには当たり前と言ってもいい方法があった。僕が観客席に座っているあいだに、周りの観客を観察することである。シルク・ド・ソレイユのショーを観る時のワクワクする気持ち、クラウンが自分を選び、舞台に引きずり出されるんじゃないか。目も合わせたくないという緊張感。そういう感情の高まりの中に僕がいて、その感情とエネルギーを自分に吸い込んで、舞台からそれを観客に吹き込むことが僕の仕事だ、と理解した。「普通の日本人」になる、とは考えず、僕の役は観客の鏡だったと言ってもいいだろう。

僕はこの体験からもっと「日本人」らしくなったのだろうか。いや、僕の「日本人」はずっと自分の中にいたのだろう。そして、僕が観客達の鏡の役を演じていたように。観客達が自分の鏡になり、自分の中の「日本人」が見え、理解できたのだろう。早くも一年半早経って、アメリカに戻ってきた今でも、この「日本人」の自分は、僕の大事な忘れてはいけないことなのだと思う。

僕はまたロスアンジェルスで仕事探して頑張っている。「日本人」の自分を忘れずに。

筆者略歴

2003年 UCLA 演劇・映像・テレビ学部演劇科卒

2001年 American River College 演劇専攻

1989~1999年ポート・オブ・サクラメント補習授業校（小学部2年から高校2年まで在校）

<https://www.imdb.com/name/nm2473600/>

以上、ポート・オブ・サクラメント補習授業校の藻谷容子先生が2008年に発行された30周年記念誌の卒業生の寄稿文から見付け、本人から許可を得てお送りいただいたものです。

（本文は縦書きの文集のコピーでしたが、担当の方で横書きにしました）

最近はますます、活躍されているようです。

彼の近況は こちらです↓

<http://www.daisuketsuji.com/news/>

また、アメリカの大学を卒業後、学費が高い米国ではなく日本で医師を志した卒業生もいます。まだ卵で、今度国家試験受験だそうです。

<https://study.catal.jp/?p=2232>

この卒業生はほんの一例ですが、日本でも最近、大学レベルでも国際化が推進され、英語で学ぶことができる分野も増えています。そのような中でも日英両言語が読み書きまでできる人材はまだまだ貴重だと思いますので、補習校で学ぶことで、学びの可能性がさらに広がることはあるのではと思います。卒業後も彼とやり取りが続いている先生によりますと「補習校で学んだことがすべて現在の自分につながっており、貴重な人生体験だった」と明言されているそうです。（藻谷容子）

エリザベスタウン日本人補習校
緒崎 千絵

子供たちと触れ合うにつれ、人は人の役に立つとうれしく感じ、それが成長の糧になるのだなというも感じています。

自分の将来の為、ということだけですと、自分は別に、、、という考えに至りますので、、、。

中学生や高学年を教えていたときは、「学べない人の為に学ぶのだ！」という、吉田松陰の言葉を使い、低学年には、世界の実情を視覚化し、身近な例もあげながらできるだけ生徒が自分で考えていくように、以下の感じで話し合いをしました。

1. 皆さんは知らないけれど、、、と、今も世界では自分たちと同じ年頃の子供たちが過酷な環境にいるということを添付の資料を見せ、なるべく生徒に感想と考えを出させて、どうしてそうなっているのか、どうしたらその子供たちが笑顔になるのかを話し合う。

→ 争いの回避に必要な話し合いをするための言語能力・想像力・倫理観や、生きていくための(りんごは種を植えて増やしていくなど) 基本的な知識が得られるはずの“学校”(教育)が必要という結論になる。

2. その子供たちと自分たちの間には人として何の違いも無いということを一前提とし、自分たちには“たまたま”衣食住に困らず二つの文化まで学べるという環境が与えられているのだということ、そして実は自分たちもたくさんの人の助けがあって生きていることを確認し、人がよるこぶと自分もうれしい、人と分け合うことのうれしさなどの気持ちも掘り起こしつつ、自分たちがすべきことは、、、と話し合う。

→ 今の自分達ではできることは限られているが、もっと学校でいろいろなことを学び、頭と心(体も)の筋肉を鍛えることでよりよい解決方法を見つけ、将来に実践していくことで多くの人たちの役に立つという結論に至る。

(補足 : 子供たちからは、ITを学び、世界の人全員が会話ができるようなシステムを組みたい、余剰食物を不足しているところへ確実に届けられるようにしたい、農業技術の援助もしたい、世界の懸け橋になって紛争をなくしたり、教育の機会を広げられるような活動をしたい。などなど、その学年なりのその時点での目標が見えたようでした。)

「補習授業校で学ぶことの意味」というよりは、学ぶことの意味となりますが、土曜日まで学校で大変だけれど、“二つの文化を学べることができる自分”のやるべきことは、まずは学ぶこと、、、というように、迷いが生じたときの前向きな動機づけの一つにはなるのではないかと考えております。

毎週、生徒の「あ そうだったんだ！ わかってうれしい！」という輝く瞳を見ることを目標としていますが、瞳を輝かせるまでの力に、また、至ってからの自らの喜びを、未来の世界の人たちの喜びと重ねられる感動も味わえることを願っています。

別添資料 そのこ PDF
そのこの世界、私のせかい

参考になるサイト <https://land.toss-online.com/lesson/abn2kbeg4fu5oemn>

卒業生の励ましのメッセージ

情報交換会#32「補習授業校に通う意味」で発言させていただきましたリッチモンド日本語補習校の中2教員、三川早苗と申します。いつもお世話になっております。発言の中で、幼稚部と中3のときに補習校に通った娘の例をお話しさせていただきました。その娘が綴った現役生徒さんへのメッセージを、誠に僭越ながら紹介させていただきます。

以下のメッセージは、補習授業校に通う生徒の皆様におくる励ましのメッセージとして2020年、メッセージ集、「海外の子供たちへ お見舞いと励ましのメッセージ」に掲載されたものです。そのメッセージ集は「被災地にクリスマスカードを送ろう」プロジェクトの発起人・田中拓男氏が、長年クリスマスカードに協力された海外の日本人学校、日本語補習校及び団体へのお礼として編集され、海外にオンラインで送付されたものです。

娘の寄稿については、大学でのESS（全国英語弁論団体）での活躍が同氏の目に留まり、娘に寄稿文をご依頼くださったという経緯がありました。そのメッセージ集は前述のとおり、プロジェクトにご協力のあった補習授業校のみに送付され、また90ページに渡るファイルだったということもあり、今回、情報交換会のテーマに沿う娘のメッセージを抜粋し、改めて紹介させていただくことで、日本語補習授業校で日本語を学ぶ子どもたちへの励みになればと思いました。娘は「日本語を学んだことにより、日米両方の文化への理解が深まり、視野が広がった。このことは一生の財産になった。」と申しております。

<補習授業校の生徒の皆様におくる励ましのメッセージ>

三川エリー(Elle Mikawa) 上智大学国際教育学部3年生

アメリカ合衆国 リッチモンド補習校卒業生

はじめまして。東京の上智大学3年生国際教育学部の三川エリーと申します。現在、世界中の皆さんが、コロナ禍によりいつもの日常を奪われ、辛い思いをしていると思います。私が住んでいる東京は、今は外出できるようになりましたが、やはりステイホーム期間は精神的に減入る時がありました。私は単身生活をしているので、ずっと一人きりで家にこもっていた時、いつまでこの生活が続くのだろうと思うと、不安になりました。早くお友だちに会いたい、アメリカにいる家族とも会いたい、大学に通いたいと思いました。と同時に、医療従事者の皆さまや、とても苦勞している方々のことを思うと、自分のおかれた立場に感謝し、このコロナ禍は、日常が当たり前ではないのだということ、改めて気付かせてくれました。不安になった時は、本を読んだり、私が去る12月で引退した英語弁論部の運営の仕事をしたり、勉強したりして何かに没頭して過ごしていました。すると毎日があつという間に過ぎて行きました。気付けば夏が到来していました。

約3年前、私は上智大学に入学するために、米国バージニア州から引っ越してきました。私は生まれも育ちも米国で、父が英語を、母が日本語を話すという家庭で育ちました。日本に行く回数を重ねていくうちに、日本が大好きになり、現地校との両立で多忙な生活に追われても、日本語の学びを嫌になることはありませんでした。高校生になると日本の大学に行ってみたいと思うようになり、中学部までの日本語補習校を卒業後、日本語の本の読書や漢字の勉強などを自分なりに続けました。その結果、日本で大学生になり単身生活をするようになって、言語において不自由はなく、大学で日本語のクラスがあっても、難なくついていくことができました。と言っても、初めて親元から離れた私は、最初はホームシック

にかかり、精神をコントロールするのが大変でした。寂しさをかき消すように学業に打ち込んでいたのですが、半年ほど経ったころ、友人から誘いを受け、ESS(English Speaking Society)と呼ばれる英語弁論部に入部することに決めました。私は何年もフィギアスケートをしていたので、スケートを人前で滑ることはできましたが、根本的には恥ずかしがり屋なため、人前で話すことが苦手でした。弁論をやってみようと思ったのは、恥ずかしがり屋を克服したいという気持ちもあったのです。

最初の大会では準備から当日の弁論まで全力で臨んだのにも拘わらず、芳しい結果ではありませんでした。審査員からのコメントを見ると、英語弁論は、原稿の内容や構成、書き方が審査項目の中で大きく重視されること、また話している最中の、間の取り方やジェスチャー、声の大きさ、目線などもとても大切だということがよくわかりました。私は悔し涙を流しましたが、その時の苦い経験は、その後の成長の起爆剤となりました。気持ちを鎮めて、審査員から頂いたコメントを参考に、先輩に相談しながら、何度も原稿を書き直し、学校の勉強以外のほとんどの時間を弁論の準備のために費やしました。その甲斐あって、後の大会では、次々と好成績を残せるようになっていきました。また、現役中は、勝つことだけが目的ではなく、弁論を通じて、主張したいことを世間に広め、社会を良い方向に変えていきたいと思うようになり、どんどん弁論に引き込まれ、熱が入りました。入部からあつという間に1年9ヶ月が経ち、情熱を傾けた私の英語弁論現役生活は去る12月に幕を閉じましたが、何一つ悔いはありません。現在は、インストラクターという立場にあり、円滑にESSが運営されることや、後輩の成長ぶりに喜びを感じています。

皆さんは、これから将来の進路を決めていく立場にあり、中には、大学の選択において日本にするか現地にするかで、迷われる方もいるかもしれません。いずれにしても、どうか日本語を頑張り続けてください。日本語ができるということは、あなたの選択肢や世界が広がることなのです。現地校との両立で大変な時もあるでしょう。でも諦めないでください。努力は必ず報われます。私も、米国にいたころを振り返れば、さまざまなことを同時にこなすのに、困難な時がありましたが、日本語を諦めなかったために、一人でも日本でやってみようという勇気が出たのだと思います。また、日本語を続けたからこそ、今の私があると言っても過言ではありません。私は将来、弁論で身に付けた力を生かせるパブリックスピーカー(講演家)や、子どもたちに英語や英語弁論を教える職業に就きたいと思っています。もしも将来、障害に直面し挫けそうになっても、今まで日本語や英語弁論などを諦めないで頑張り続けた自信が、きっと自分自身を支えていけると自負しています。

最後に、私がここまで頑張れたのは、自分の力だけでなく、家族や周りの方々の支えがあったからに他なりません。感謝の気持ちでいっぱいです。将来社会に貢献して、できる形で恩返ししていきたいと思っています。私がいっつもおこがましいかもしれませんが、皆さんも周りの方々への感謝を忘れずに、自分を信じて、やってみたいことにどうか怯まずチャレンジしてください。コロナ禍が一刻も早く収束し、皆さんがいつもの日常を取り戻し、不安を持たずに、生き生きと充実した日々を送れますことを願ってやみません。日本から愛を込めて……心から応援しています。

戦績**<2018年度>**

EAST JAPAN5位入賞、三上杯準優勝、春キエフ出場、JUEL CUP 出場、小川杯出場、チェスター杯優勝、天野杯優勝、だるま杯準優勝、福澤杯優勝、ウィリアムズ杯準優勝、紅葉杯3位、岡山大学実長杯優勝、末川杯優勝、梅子杯出場、大隈杯準優勝

<2019年度>

EAST JAPAN4位入賞、三上杯出場、大木杯準優勝、新島杯準優勝、JUEL CUP 出場、小川杯準優勝、天野杯優勝、だるま杯優勝、福澤杯優勝、新渡戸杯準優勝、法政大学総長杯出場、早稲田杯出場、ギヤロット杯予選通過、聖心女子大学実長杯優勝、梅子杯3位、ポテト杯予選通過、大隈杯出場

リッチモンド補習校 元中学部先生のコメント

日本で自活しながらしっかり勉強して、また新たに挑戦するものも見つけて結果をだし、そして今度はその力で自分を支えてくれた人たちに還元・貢献する。本当にすごいことだと思います。エリーちゃんの持ち前のチャレンジ精神、真摯に努力し続けるひたむきさ、周りに感謝を忘れない謙虚さ、の全てがあったとのこと。そして、早苗ちゃん スティーブ さん、健くん、晴くんの家族愛をいつも近くに感じているからきっと頑張れるんだろうね！こんなご時世だし、体調だけは気をつけて。これからもずっと応援しています。

**(以上、メッセージ集、「海外の子どもたちへ お見舞いと励ましのメッセージ」
2020年7月 プロジェクト代表・田中拓男氏編集 p19~21より抜粋)**

ご一読いただき心より感謝申し上げます。
現在、娘は9月に大学を卒業し、将来の方向性を再度検討した結果、まずは就職して社会勉強をすることにしました。11月中旬から、某外資系ITコンサルタント会社東京支社に就職することが決まっています。バイリンガルであることは、就職する際にも有利に働いたようです。

最後に私ごとですが、日本語に関しては、三人の子どもの中で、娘が一番堪能です。次男は日本語への興味が上の二人よりも薄く、日本語の学びにおいてうまく導いていく苦勞を、親としても実感していて、学校の生徒さんにも次男にも長く長く諦めずに日本語を続けて欲しいと願い、できる限り励ましています。

美しい日本語が海外で継承され、子どもたちがきらきら輝きますように。

2021年 10月27日

リッチモンド日本語補習校

三川 早苗

ミラノ・グローバル・ラーニング・アカデミー 磯 会理子

先日の情報交換会で、2015年に開催されたミラノ国際博覧会（EXPO 2015 MILANO）に於いて、補習校の卒業生たちが日本語とイタリア語や英語を流暢に操り、日本館の数多くのイベントで司会者や催し物のプレゼンターとして大いに活躍したというお話をしましたが、逆に言えば、そのような仕事を任せてもらえるぐらいに日本語・国語力がついていたと言えるのかもしれませんが、その中のほとんどが、高等部まで頑張って通い続けた子たちです。

補習校の現場に長年関わり、補習校に通ってくる子供たちの日本語環境の変化を年々感じながら、その都度先生方と試行錯誤し方法を探りつつ子供たちの教育に向き合ってきました。そして、長期滞在型や永住型の家庭が増え、家庭での子供たちの言語環境が多様化してきている現在、文科省からは、日本人学校や補習校・補習教室を、国際社会に対応できる豊かな人間性を持つ日本人－グローバル人材の育成の拠点にしようという方針が打ち出されています。ここで言われるグローバルとは、様々な語学が出来ることをいうのではなく、国際社会で生きる日本人として自分なりのアイデンティティーをきちんと持ちながら考えをしっかりと発信でき、また多様性を認め異文化理解の精神も育ていけるということではないでしょうか。ですから、日本国籍を持ち日本にルーツのある子供たちにとっては、補習校で日本語の国語教育をしっかり継続的に行っていくこと、それが、子供たちが選択できる一つの日本人としてのアイデンティティーを培い、それぞれの国や社会の中で生きていくための大きな手助けになるのではないかと考えます。特に現地に長期滞在している子供たちにとっては、将来や自分のアイデンティティーについて意識していく気持ちが強くなる中学・高校の年頃に、同じ境遇の仲間とそういうデリケートな問題を共有し、自分を確立していくことのできる場所が補習校でしょう。ですから、子供達には補習校をできるだけ続けてほしいと思いますし、そのためには、学校側も子供たちが分かる喜びを得られるような授業や体制を工夫していくことが大切だと思っています。それには、教員のみならず、運営委員や保護者など補習校に関わる全ての人が同じ方向を向いて協力していくことは欠かせないでしょう。

★私が2019年3月まで校長をしていた前任校の2006年度の文集（2007年3月発行）から、卒業生の作文を紹介します。（作文と個人名の掲載については、本人に了承を得ています）

『補習校』

高等部三年 松山 龍平

「補習校の宿題をやったの。」と母の声が家中に響き渡る。冷や汗を流しながら、大きくうなずき、家からすばやく逃げる。母のしつこい事情聴取クリア。これを乗り越えたら、後は楽にいける。母に見つからないように鞆の中に隠したゲームボーイを取り出し、学校へゆっくと向かう。

僕は小さい頃から、補習校に行かなければならないということを許せなかった。土曜日の午後、しかも一番眠い時間帯に、なぜ僕らは日本語を勉強しなければならないのだろうと思っていた。というよりも僕は日本語が自分の母国語だと実感出来ていない。なぜならば僕の生活の半分以上はイタリア語を使っていて、幼い頃からイタリアの学校でイタリア語の文法をベースに勉強してきたからである。日本語を学ぶということは、誰にとっても難しいことだと思う。それなのに、日本語の完璧さを僕らのようなイタリア生まれイタリア育ちに求めるというのもさらに難しい。僕はイタリア語の文法をベースにしているため、日本語で「ひげを剃る」という言い方をイタリア語から直訳してしまい「ひげを切る」という間違っただけの言い方をしてしまう。何回注意されてもこのような使い方は直らない。このような生活をしている僕らが日本語を完璧に学ぶということはすごく難しく、ほぼ無理なことだと思う。では、何故僕は日本語を毎週土曜日勉強しているのだろう。それは一応日本人であるからと、将来必要になる可能性があるからだと思う。

中学3年まで、自分の日本語の能力は十分だと思っていた。だが、僕の補習校生活は高等部に入ってから全面的に変わった。クラス内で先輩たちを見てきて、自分の日本語の知識のなさに気づき、がんばって先輩達を超すために勉強してきた。僕が下級生だった時は、すごく優秀な先輩達がいいたため、僕はこの「壁」を乗り越えるため一生懸命に勉強してきた。先輩達を手本にしてきた。しかし、いざ自分が先輩の立場になると大変なことだと分かった。何をすればよいのか、何を教えればよいのか。僕のようないい加減な男が後輩達の手本になれるのか。この疑問を抱えてこの最後の年を迎えた。だが、イタリア人学校の勉強も難しくなり、今年はほとんど欠席してしまい、先輩という立場をまったくとれなかったことと、後輩たちの手本になれなかったことをすごく悔しく思っている。

「正しい日本語を習うとは、ほぼ無理なことだと思う」と言ったが、僕にとって十二年間の補習校生活が無駄だったと言っているのではない。この学校で学んできたことや、教わってきたもの、色んな思い出を大切にしていきたいと思う。僕の将来のために、そしていつか補習校の大切さが解ったときのために。

(文集の本文は原稿用紙に縦書きですが、便宜上、私の方で横書きにしました)

備考)・高校まで続ける生徒は、ほとんどが自分の意志で高等部に進むことを決めているようです。当時、高等部は、1年～3年までの複式クラスでした。幼い頃から、何となくもやもや感じてきた自分のアイデンティティーを強く意識し始める思春期の頃、学年の違う生徒達と同じクラスで共に学ぶことで、お互いにいい影響を与え合い刺激し合うという相乗効果が、この作文を読んでもわかります。「補習校に行かなければならない」ということを許せなかった」子供が、高校卒業時には、「後輩たちの手本になれなかったことをすごく悔しく思っている」というふうに成長しているのです。

*松山龍平さんは、小学1年生から高校3年生まで補習校に通っていました。2010年に日本に

移住して音楽活動を開始し、現在、ピアノスリーピースバンド「Ryu Matsuyama」のボーカル・ピアノ担当のRyuとして活動しています。2018年にはメジャーデビューを果たしました。

あるインタビューで彼は、「幼少期からずっと自分のアイデンティティーに悩みながら育ってきました。日本人でありながらイタリアで生まれてしまって、最初はイタリア語しか話せなくて。イタリアの友だちからは『おまえは日本人だ』と言われ、日本人の友だちからは『イタリア人だ』と言われる環境で育ってきましたし。(中略)早い段階で「自分は何者なんだろう?」という疑問も生まれるんですよね。小学生くらいからそういう疑問がどんどん強くなっていきました。」と語っています。

(<https://www.cinra.net/article/interview-201705-ryumatsuyama>)

また、日本で生活を始めた頃の日本語の問題については、「言葉の問題はあまり感じませんでした。それはずっと通っていたミラノ補習校のおかげです。(後略)」

自分のアイデンティティーはどこにあるかという質問には、「昔は、<イタリア人でもない、日本人でもない>というのがコンプレックスでしたが、今はむしろそれが僕であり、常にアイデンティティーを探し続けていく面白さがあると思っています。それを探ることで僕の歌詞が出来上がっていると感じているので、今は非常にありがたい気持ちです。」と語っています。

(<https://www.ciaojournal.com/2019/03/19/ryu-matsuyama/>)

現在の活動の様子は、以下をご覧ください。

HP: <http://ryumatsuyama.com/>

Instagram: https://www.instagram.com/ryu_matsuyama/